

## 第6回FDセミナー ―雑感―

システムデザイン学部情報通信システム工学コース・准教授  
片山 薫

第6回(平成19年度第2回)TMU FDセミナーが、FD委員会主催、教務委員会・基礎教育部会共催で平成20年2月22日(金)13:00から南大沢キャンパス6号館101室において開催された。

初めに上野淳基礎教育センター長・FD委員会委員長より、大学認証評価との関係で単位の実質化、成績評価の厳格化が求められている中、本学の取り組みについて多角的なご意見を頂きたいとのお話があった。引き続き西沢潤一学長より、教育の評価はその教育を受けた人と受けなかった人との比較において行うのがよいのではないか、「結果よければ全てよし」とする視点が必要ではないか、また研究会に時間をとられて肝心の授業がおろそかならないよう生きた授業の中で実証的に進めてほしいとのお話があった。

基調講演は、岩手大学評価室の大川一毅先生による「成績評価の共通指針 -ブラックボックスからの脱却に向けて-」であった。大学教育における成績評価のあり方は質保障における重要な課題となっていること、大学設置基準においても成績評価基準に関する規定が加えられ本年4月より施行されること等の現状についてご紹介を頂いた。また、首都圏の複数の大学の学生を対象として行った成績評価に対する意識についてのアンケートから、実験、実技、語学の成績評価に対する信頼は高いが講義科目では低いこと、成績評価基準が不明確であると感じていること、シラバスには授業内容だけでなく到達水準についての記載を希望していることなどが分かったとのお話があった。その後の質疑応答では大川先生から、大学の認証評価においては「80点以上をAとする」等のように成績評価基準を明確にすることが求められていること、何を80点とするかということの規定することが指標でありその集積によって成績評価をすること、単位の実質化においては学生が一人で勉強するだけでは不十分であり授業との連携によって学ぶことが求められているとのお話があった。

また司会の荻原先生から、講義科目の成績評価に対する信頼が低いのは大人数を相手にするのでそれぞれの学生に教員の目が行き届かないからではないか、大人数の講義ではティーチングアシスタントを雇用する等組織的

なサポートが客観性を保つために必要ではないかとの意見が出された。

パネルディスカッション「成績評価方法について」では、健康福祉学部の福士政広先生による趣旨説明の後、5人の先生方に授業や学部における成績評価基準についてご紹介頂いた。

基礎ゼミナール部会的小林正典先生(理工学系数数理科学コース)より「基礎ゼミナールの成績評価基準」について、基礎教育部会・都市教養プログラム部会長の宮台真司先生の代理としてFD委員会の舩本直文先生より「都市教養プログラムにおける成績評価方法」について、基礎教育センターの永井正洋先生より「情報教育科目における成績評価方法」について、

理工学系化学コースの伊奥田正彦先生より「都市教養学部理工学系における成績評価方法」について、都市環境学部の西村和夫先生より「都市環境学部における成績評価方法」についてお話頂いた。その後、各先生方より以下のようなコメントがあった。

- ・基礎ゼミナールでは評価基準についてあまり大きな問題は無いと考えている。出席を重視しシラバスにおいて評価基準を学生に示すよう先生に依頼した。
- ・講義の過程の中で評価を行うこと、教員どうしてノウハウを共有することが必要である。
- ・情報リテラシー実践で身につけさせることを明確する中で、評価における観点が明確になり、それが教員の共通理解となることが成績の標準化につながると考えている。
- ・理工学系では共通基礎科目の成績にばらつきが大きい。そのため、初年度に試験を多くするなどして学生のレベルを揃える必要があると考えている。
- ・講義における到達目標があるなら、それに到達できるように授業を工夫して、平均が50点になるような試験をする努力が必要である。教師自らの実践を振り返り改善することが重要である。

また会場からの質問に対し、GPAの導入によって学生は履修する科目を絞る傾向があること、GPAを早期卒業や大学院への推薦に利用しているため成績に敏感になっているとのコメントがあった。会場の上野先生より、数

学・物理などの重要な科目ではティーチングアシスタントを使って宿題や演習問題の採点をするなどの実質的なサポートをしないと学生に力がつかない。こういうことが単位の実質化につながるのではないかとのコメントがあった。福士先生より、教育だけでなく研究も重要な仕事であり、教員個人の体力・気力だけでは解決できない。

ティーチングアシスタント等の人的なサポートがあればよりよい成績評価につながると思うとの意見があった。

最後に締めくくりとして教務委員長の大橋先生より、授業中テストの話になると学生から質問が出るといったご自身の体験から、成績評価は学生と教員のコミュニケーションの機会にもなっているとお話があった。

